

サンサンスーじゃない

文責：編者 A

- ・これは非公式行事です。
- ・この文章は編者 A が特にふざけて書いていますがおこらないで下さい。

プロローグ

- ・この日は朝 9:00 から練習。おもむろに時計を見る。もう 17:00 だ。外はもう夜の様相を呈してきている。
- ・今日はいい練習であった。弦として曲にまとまりが出た。この日は私が意見を出して一日弦分奏にした。若干の自己満足と心地よい疲労感。私は荷物をまとめ帰宅の路に着こうとしていた。
- ・ふと後ろから声が聞こえた。振り返ると 2nd トップ M 氏が語りかけてきた。彼はその指導力と音楽に対する真摯な態度から、敬称をこめて M 先生と呼ばれている（マゾではない）。
- ・「ちがう、ちがう」「まだだ。いやまだまだだ。」M 先生が口を開く。聞くと、もう一步でバイオリンパートが一つになれそうだったのに、時間切れになってしまったのが惜しい。とのことだ。
- ・「全くですわ」近くにいた、M 画伯が同調してきた（マゾではない）。
- ・周りには私、M 先生を含め計 7 人がいる。
- ・M 先生が息巻く。「(もうちょっと練習しよう風のこと)」
- ・M 先生の情熱がみんなの心を動かす。

恐怖。スパルタ・サンサーンス

- ・急遽追加練習が決定された。会場は【夜逃げや M】宅だ。
- ・まず晩御飯だ。我々は急いで支度を始めた。

まずは鍋だ。

- ・「ピオラってバイオリンより大きいんだぜ。」

- ・M は仕事柄、残り物という概念を持ち合わせていない。食材はマルエツで調達した。この日初めて M 宅に砂糖が持ち込まれた。鍋はたまたま私が持ち歩いていたものを使った。

- ・鍋が完成。

- ・鍋を食す。

次はもんじゃだ。

- ・汁が土手。という斬新なアイデアであらたな可能性に挑戦。

- ・もんじゃって見た目がきたならし・・・

- ・「アター」

次はデザートだ。

・

次はさいころトークだ。

- ・一番面白くなかった人に、恐怖の苦水が提供された。

次はジャンガだ。

エピローグ

- ・もんじゃ大会はM画伯の優勝で幕を閉じた。優勝者には副賞として高級エステ券が贈呈された。